



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	長尾正克編著, 『グリーン・ツーリズム北海道からの発信』, 筑波書房, 2011年, 186頁
Author(s)	大江, 靖雄
Citation	フロンティア農業経済研究, 16(1), 29-31
Issue Date	2012-02-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65911
Type	other
File Information	16-1-5_shohyou_ohe.pdf



評

長尾正克編著

『グリーン・ツーリズム 北海道からの発信』

(筑波書房、2011年、186頁)

千葉大学大学院 大江 靖雄

グリーン・ツーリズム(以下、GT)という言葉が我が国で使われるようになって、すでに20年近くが経過している。90年代初期、評者がGTを研究テーマにしていると述べると、同僚から鼻で笑われた記憶がある。当時GTは、農業研究の専門家からは、キワモノとしての認識しか持たれていなかった。その頃からすると、現在ではその活動も広がり知名度も格段に高くなってきており、隔世の感がある。自治体レベルでの取り組みの歴史をみると、当時の北海道では「ファームイン」の海外調査などが行われ、府県レベルでは、先駆的な取り組みが行われていた。実際の取り組みにおいても、道東地域で農家によるGT活動が80年代後半から始まり、全国的にも早い時期からの活動が開始された地域といえる。しかし、その後、北海道では散発的に研究が行われる程度で、本格的なまとまった調査研究は行われてこなかったといえる。その意味では、北海道のGTの現段階を明らかにした点で、本書の意義は大きいといえる。内容について批評を加える前に、まずその内容を簡単に紹介しておこう。

本書は、全体で6章から構成されており、供給サイドおよび地域政策主体の観点からのアプローチがされている。序では、GTの日本における成立経過と特徴を簡単にレビューした後、コミュニティ・ビジネスの観点から、GTをとらえると指

摘する。

続く、Iでは、北海道におけるGTの特徴について、1990年からはじまる展開過程がまとめられている。北海道農政部が中心であった初期の頃から、GTを観光の一環として位置づけ経済部へと所管が変更されたものの、農村振興の一環としてか、観光として扱うのか、政策担当主体が未だに明確にされていないと述べる。そして、事例分析の対象として、修学旅行生を受け入れている地域区分として、丘陵・畑作地帯、水田地帯、酪農地帯の地域組織を中心に上げることが述べられる。地帯区分は、北海道で一般的な農業地帯区分に従っている。

II以降は、各論になり、地帯別の事例分析が行われる。IIでは、丘陵・畑作地帯に区分される十勝地域、富良野、美瑛の取り組みが収録され、最も多くの紙幅が割り当てられている。十勝地域は、北海道のGTの揺籃の地ともいえるので、他の地帯区分と比べて多くのページが割かれるのは納得できる。IIIでは、水田地帯の空知地域、深川、長沼の取り組みが紹介されている。IVでは、酪農地帯の別海および根室での展開事例がまとめられている。最後に、Vでは、以上の事例分析を踏まえて、地帯区分に即して類型化を行い、今後の北海道におけるGTの方向性について展望している。以下、各章ごとにみてみよう。

IIの丘陵・畑作地帯の事例で、最初に取り上げられるのは、GT先進地の十勝地域である。北海道におけるGTの創成期を切り開いてきた鹿追町ファームイン研究会から発展した北海道ツーリズム協会と、道内各活動主体が結合した北海道GTネットワークの結成に至る経過がまとめられているが、同ネットワーク自体は停滞状況にあると述べて、財政的な事情から事務局体制の補強が課題となっていることが指摘される。活動主体の事例として、道内の先駆的事例である鹿追のファームインと、新得の綿羊飼育とレストラン及び宿泊

サービスを提供する個別経営内容が紹介され、本書でもっとも経営調査らしさが現れている箇所といえる。次いで富良野の修学旅行体験ツアーの事例、および美瑛のペンショングループが取り上げられ、農業部門との連携上の課題などが指摘される。

Ⅲでは、道央水田地帯の空知地域において、空知支庁主導による修学旅行生の受け入れネットワーク化がすすめられている活動状況が取り上げられ、既存の農協や普及組織との連携の課題が指摘される。次に、その地域ネットワーク組織の一員である深川を中心とする農業体験受け入れ活動が紹介され、需要拡大に対応した受け入れ農家数の増加などの課題が述べられる。最後に、長沼町主導によるGT特区の指定に始まるGT協議会の活動状況が紹介され、初期段階における行政主導の意義を指摘する。他方で、一般客受け入れ体制の整備が課題であることも指摘されている。

Ⅳでは、道東酪農地帯の事例として、別海町GTネットワークが取り上げられ、農業者、観光業者、役場、高校、普及所等の幅広く地元からの参加による受け入れ体制があり、旅行業者との交渉を行うなどして農業体験の修学旅行を受け入れている現状が紹介される。さらに、同ネットワークのリーダーである酪農家の活動が紹介され、事務局と生徒の受け入れの並行作業が過重となっている現状から、役場や農業のより積極的な関与支援が課題としている。そして、最後の事例として、根室の酪農家集団によるフットパス創設による交流活動が紹介され、フットパスコース自体では大きな収入を期待できないため、各牧場での直売との組み合わせも必要と指摘する。今後の課題として、地域連携や、農協の農産物販売面での協力体制の整備などが挙げられる。

Ⅴでは、以上の考察を踏まえて、地帯区分ごとの類型化が以下のように行われる。すなわち、丘陵・畑作地帯は観光タイプ、水田地帯は食農教育

タイプ、そして酪農地帯は牧場タイプとして区分され、北海道のGTの方向性として、3つのタイプでは食農教育タイプで教育効果が大きいとして、一般観光客よりも食農教育と結びついた方向性を支持している。最後に、地域の行政や農協などの支援体制の強化が必要と総括している。編者は、一般観光は国内の賃金水準の低迷などで需要が減少するため、修学旅行に需要増加の活路を見出そうとしており、観光タイプも食農教育を組み合わせるべきと主張する。食農体験の組み合わせは、国内ではすでに多くの論者が以前から指摘しており、この点で目新しさは感じられない。

以上みてきたように、GTの道内における地域組織を取り上げて、その現状と課題を明らかにした点に、本書の特徴と意義がある。この点で、編者らの労を多としたい。以下では、読後のコメントを、いくつか述べておきたい。

まず、編者は、一般観光とGTを峻別すべきとする立場をとるが、両者は地域では相互補完的ではないのか？すべてが、一律に食農教育タイプにシフトすることが本当に必要なのか疑問を禁じ得ない。なぜなら、インパウンド需要がここでは考慮されていないが、すでに東アジアからの観光客は、道東酪農地帯も訪れるようになっている。ここでは、周遊型の一つの訪問先として食農体験があり、一般観光地への訪問がある。つまり、地域で補完的にさまざまなツーリズム活動を組み合わせた周遊型のツアーの開発も必要であろう。

次に、GTの事例調査は、比較的簡単に実施することができる。しかし、農村ツーリズム研究の本当の難しさは、フレームワークを作りながら実証分析を行う必要がある点にあると評者は考えている。この観点から本書を評価すると、普遍化されたフレームワークの提示という点で、正直物足りなさを感じざるを得ない。

編者らは農業経営研究者であるが、事例の紹介のみに力点が置かれ経営的な視点が余りみられない

いのはなぜであろうか？この点は、読者として物足りなさを感じる点である。それは、コミュニティ・ビジネスという視点によるためであろうか？しかし、筆者も述べているように採算性を無視しては、成立し得ないのである。従来の農業生産のみを対象とした経営分析から、新たな観点を導入した経営分析の枠組みを提示してほしかった。

評者の立場からみると、日本のGTの発展は西欧に比べてその速度が遅いのは、制度的な制約はもちろんであるが、経営政策がないことによる部分が大きいのと考えている。農業経営活動として、とらえる観点が今後決定的な重要性を持つと考える。

関連して、参考文献が最後にわずか4点挙げられているのみで、レビューがなされていない点は、研究書としては重要な部分を欠いているといえる。つまり、すでに過去20年間にわたる我が国のGTの研究成果や動向を踏まえて、本書をどのように位置付けて貢献をしようとしているのかを、冒頭で明らかにしてほしかった。その意味で、本書は研究書というよりも、調査書としての位置づけの方がよりふさわしいといえる。

その背景の一つには、農業研究で伝統的にみられる北海道特殊論が、ここでも暗黙的に前提とされているためではないかと考えられる。少なくともGTの研究においては、そろそろ、北海道の研究者も北海道特殊論から脱却していただきたい。GT活動は、もちろん地域の特性を踏まえた活動による多様性はあっても、直面する課題は共通点が少なくない。北海道から全国、そして世界のGTへの発展に向けた提起をしても良い時期にきているといえる。そうした、普遍性を目指した先導的な研究成果を北海道から期待したい。

第3に、コミュニティ・ビジネスに関連して、地域組織は、評者がフィールドとする千葉県をはじめ府県では、一般市民がGTに関与するケース

が増えてきている。そうした地域住民の参加による地域組織についても、今後より議論が深められる必要がある。

第4に、本書で想定するGTの市場は、修学旅行の市場を主に対象としている。つまり、量的な観光客の集客の段階にあることが暗黙の前提とされ、サービスの質の議論はなされていない。修学旅行は、受け入れ数を増やすことができる点、また毎年安定した需要が確保できる点で、各地で誘致競争が激しくなっている。しかし、短所もある点は認識しておく必要がある。一つは、修学旅行は、所詮マスツーリズムであることである。評者は、マスツーリズムを一概に否定するものではない。日帰り中心とならざるを得ない我が国のGTの展開にとって、重要なマーケットであることは間違いない。しかし、他方でGTは、クオリティ指向のニッチ・マーケットである点も、GT本来の在り方との関連で忘れてはいけないと考える。つまり、修学旅行は、クオリティマーケットではないという点である。したがって、エントリーモデルとしての有効性は評価しつつも、品質向上への努力を継続するためにも、一般社会人消費者の市場へ目を向けることを忘れてはならないと考える。

紙面が尽きたので、まとめよう。本書は、北海道のGTの事例を、地域運営の組織というコミュニティ・ビジネスと食農体験サービスの観点から、まとめた点に特徴がある。我が国のGTは、その発足から20年が経ち、事例分析から脱した分析フレームワークの構築が求められている。本書を契機として、今後、北海道から、道内のみの議論ではなく、広く我が国のGT研究に貢献する骨太な研究が発信されることを期待したい。